

## 茜色の歌姫



## 第四部 白村江の戦い



白村江の戦い想像図

春正月の丙申の朔庚申に、御船、還りて那大津に至る。(中略)五月の乙未の朔癸卯に、天皇、朝倉橘広庭宮に遷りて居ます。是の時に、朝倉社の木を断り除ひて、此の宮を作る故に、神怒りて殿を壊つ。亦、宮の中に鬼火見れぬ。是に由りて、大舍人及び諸の近

侍、病みて死れる者衆し。(中略) 秋七月の甲午の朔丁巳に、天皇、朝倉宮に崩りましぬ。  
〔『日本書紀』卷第二十六〕

齊明天皇代 額田王の歌

熟田津に船乗りせむと月待てば潮もかなひぬ今は漕ぎ出でな

〔『万葉集』一卷〕

大唐の軍將、戦船一百七十艘を率て、白村江に陣烈れり。戊申に、日本の船師の初づ至る者と、大唐の船師と合ひ戦ふ。(中略) 須臾之際に、官軍敗績ねぬ。水に赴きて溺れ死ぬ者衆し。

〔『日本書紀』卷二十七〕

### 第三章 潮もかないぬ 660～661

その年の七月、唐の蘇定方將軍率いる二百艘の水軍が西より、新羅の金庾信將軍率いる一万の兵が東より、国境を越え、百済の王都・泗沘城を挟み撃ちにした。やがて城は陥ち、多くの財宝は略奪され、数百の女官が敵の辱しめを免れるため、城の背後の扶蘇山に登り、崖から錦江に身を投げた。

義慈王以下、諸王子王女や后、主だった將軍や大官は唐に連行され、ここに百済王家は滅びた。報せはただちに大和にもたらされ、飛鳥は喧騒に包まれた。今にも唐と新羅の軍が連合して海を越え、大和に攻め入るとの流言が飛び交い、田畑を捨てて東に逃散する民が後を絶たなかつた。連日、岡本宮の太極殿では朝議が開かれ、蘇我をはじめ主だった大官は、すぐにも大軍を興し、新羅を討つべしと言ひ募つた。

しかし、宝大王は黙したままであった。何も決まらぬまま、焦燥に駆られた大官どもは、大王の御前で胸倉をつかみ合い、唾を相手の貌に吹きかけて喚いた。

「まずは」

朝議が六日に及び、ひとびとが口論に疲れた頃、宝大王はようやく詔した。

「蝦夷にある豊璋王子の選りを待つべし」

翌日より朝議は開かれず、岡本宮の門は固く閉ざされた。

五日の後、豊璋王子は一艘の船に乗り、飛鳥に還つてきた。その船に、大將軍の阿倍比羅夫をはじめ、十市皇女や額田郎女の姿はなかった。

「肅慎と蝦夷の間に和が結ばれた。その和を確かなものにするため、彼等はいま少し、蝦夷に留まらねばならぬ」

いつしか豊璋王子は大和言葉を習い覚え、訳語なしで、自在に大和の大官と語り合えるまでになつていた。

王子が還つてきても、朝議は開かれなのまま、三日が過ぎた朝、河辺宮の門を叩く者がいた。大海人皇子の部屋に通された女孀は、鏡郎女の配下と名乗った。

今宵、岡本宮に参じたまえ、とのみ告げ、女孀は去った。

大海人皇子は躊躇った。朝議の場で皇子は、いま軍を興せば、大王の倉の財の費えや、民の負担の重くなることを訴えた。しかし、葛城皇子や蘇我や巨瀬ら大官の声に、皇子の訴えは掻き消された。彼等は喚いた。やがて新羅が高句麗をも滅ぼして三韓を征服し、唐の後ろ盾を得て海を越え、大和に攻め入れれば如何、と。

宝大王は一年前、阿倍比羅夫の水軍を、肅慎を鎮めるため、蝦夷に派すべしとの大海人皇子の献策を諾した。徒に軍を興すのではなく、まず民の生業を安んじるべし、との皇子の訴えに、賛意を表してくれたはず……。

とはいえ、いま岡本宮で大王の側近く侍っているのは鏡郎女。三韓出兵を画策する鏡郎女が、大王を説き、その意を変じていたとしても、不思議はない。鏡郎女に抗しうるのは、額田郎女だ。しかしその額田郎女は遠く蝦夷の地にある。

そして、鏡郎女が、皇子を岡本宮に呼んだ。

「行くべきではない」

置始比等、村国男依、海部石床、朴本大國ら舍人は、口々に押しとどめようとした。

有馬皇子の例もある。葛城皇子やその一派が、如何なる畏を仕掛けているか、分かったものではない。

「さりながら」

皇子は意を決した。

「宝大王を直に説き、三韓出兵を止めるのは、今しかない」

岡本宮の一室に、老いたる女王は、やつれた面差しで大海人皇子と対座した。大王の傍らには、鏡郎女が俯いて侍っている。

「大海人皇子よ」

大王の声はしわがれ、一年前よりもさらに衰えを思わせた。

「刈り入れの終わるのを待ち、都を筑紫へ遷す」

皇子は拳を握り締めた。西の筑紫の海を北に越えれば三韓の地。即ち、大王自ら軍を率いて筑紫に赴き、新羅征討を采配するとの意に他ならない。

大王は続けた。

「吾のみならず、葛城皇子をはじめ大王家に連なる者は悉く、吾とともに筑紫の新都に赴く。されど、汝は独り、飛鳥に留まり、留守司を務めよ」

言い終えて、大王は立ち上がり、踵きびすを返して寝屋ねやへと去った。皇子が呼び止める隙も与えず、姿を消した。

「皇子よ」

黙っていた鏡郎女が貌を上げ、口を開いた。

「新羅や唐との軍いくさ。もし敗れば、彼等が海を越えて筑紫に攻め寄せ、大和の大王家が、百済王家と同じ災厄に遭う懼おそれあり。その時は、大海人皇子が飛鳥にあつて、大和を差配さはいすべし、と大王の意である」

吾が大和を……？

皇子は鏡郎女を見た。伏し目がちなその面差しに、偽りの色は見られない。

「大和が敗れることもあり……、大王はそう詔みことのりされたのか」

「吾にのみ、そう詔された」

「さらば」

皇子は膝を進めて、鏡郎女に詰め寄った。

「何故に大王は、徒に大和を危うくする？」

三韓出兵を止めれば、さような懸念はせずともよいではないか。

「もはや止められぬ」

鏡郎女は、強張った面差しで言った。

「蘇我をはじめ大官どもは、三韓の鉄を欲し、戦を望んでいる」

分かりきったことを、と詰め寄る皇子を、鏡郎女は制した。

「豊璋王子は、すでに蝦夷にて百済王家の滅びを知り、鬼室福信きむろふくしんら配下の將軍を百済に遣わした。聞けば、新羅と唐は、百済王家は悉く拉致らちし去ったが、僅かに五つの城を押さえたのみ。豊璋王子は、鬼室福信らをして、各地の百済遺臣を糾合し、唐や新羅の支配に抗あむかわせる。その間に、宝大王は西の国々より兵を徴し、唐に抗しうるだけの大軍を催し、筑紫に遷る。あるいは、唐が無用の軍を避けるため、唐の地に幽閉した百済王家のひとびとを還せば、軍は避けられよう。しかし」

郎女は、眼を伏せて言った。

「蘇我をはじめ、大官どもの総意は、軍を興し、三韓を大和の版図とするにあり。大王といえども彼等の意に反するわけにはゆかぬ」

「鏡郎女とも思えぬ気弱さかな」

皇子は叫んだ。

「蘇我や中臣が何を唱えようと、土蜘蛛どもを使い、その声を封じてきたのは、鏡郎女ではないか。即ち」

皇子は、鏡郎女の胸倉をつかんだ。

「鏡郎女よ。誰よりも三韓出兵を望むは、汝であろう」

「何故に」

鏡郎女は手を伸ばし、皇子のふぐりを掴んだ。皇子は息を呑み、痛みに貌を歪めた。

「皇子は出兵を諾したまわぬ」

「それは……」

皇子は喘ぎつつ、声を振り絞った。

「すでに朝議で陳べた」

「小豪族や民の苦しみを救うためであったな」

鏡郎女は、皇子の貌を掌で張った。皇子は仰向けに倒れた。

「それ故に大王は皇子を、飛鳥の留守司に任じたもうた。それが分からぬか！」

激痛に苛まれつつ、皇子は貌をあげ、鏡郎女を見つめた。郎女は立ち上がり、頬を赤く染めつつ、肩を震わせて言った。

「大王が筑紫にある間、諸国よりの税を差配するは留守司。すなわち、軍の費えを国の蔵よりまかなうか、さらに民に税を課すかは、皇子に任される」

言い終え、鏡郎女は再び面差しを強張らせ、座した。皇子はやっと身を起こした。郎女は静かな声音で続けた。

「かつて豊日大王、難波に都を遷された折、留守司の中臣金は、多く税を民から懲し、国の蔵には少ししか収めず、多くを彼が蔵に収めた。大海人皇子の他の誰を留守司にしようと、中臣金と同じ事をする。すなわち、汝を留守司に任じたは」

郎女は、息を接いで言った。

「宝大王が最も信を置くは、大海人皇子ゆえにとこそ、知れ」

皇子は息を整えた。ふぐりの痛みは和らいだ。背筋を伸ばし、問うた。

「葛城皇子は、如何なる意なりや」

「葛城皇子が、大海人皇子に信を置くと思うか」

郎女は言った。大海人皇子を留守司に任じる件は、葛城皇子も大官どもも、悉く反対した。しかし大王は頑なに譲らなかつた。ゆえに、葛城皇子等も折れた。

ただし、条件が二つある。

「ひとつは、額田郎女と十市皇女、さらに高市皇子は、筑紫に赴くこと」

「質か……」

高市皇子は、大海人皇子が小豪族である胸形の娘に産ませた、いまだ六歳の童子。

大海人皇子の血を引く十市皇女と高市皇子、さらに額田郎女を筑紫に置くは、葛城皇子や蘇我等の意に反して動けば、彼等に害が及ぶとの嚇しに他ならない。

「さらにひとつ」

鏡郎女は言った。

「葛城皇子の娘、大田皇女を妃とし、河辺宮に住ませること」

「大田皇女？」

「然り」

「葛城皇子に、さような名の皇女がいたとは、知らぬ」

「そこにおわす」

鏡郎女は手を打った。戸が開き、衣擦れの音とともに、入ってきた者を見て、皇子は眼を見張った。

亡き有馬皇子の異母姉、小足皇女であった。

有馬皇子より二歳上。二年前、有馬皇子の二上山の仮宮にて、大海人皇子は、有馬皇子とともに、小足皇女とまぐわった。多淫にして暗愚、言葉をすら覚えていなかった皇女は、深々と大海人皇子に拝礼し、懐かしげに顔をあげ、言った。

「久しぶかな、皇子よ」

はつきりとした物言いに、皇子は戸惑った。鏡郎女が微笑み、言った。

「有馬皇子が討たれて後、誰の庇護も受けなかった小足皇女を、葛城皇子は養い女とし、名も大田皇女と改めさせ、吾等に育ませた。二年のうちに言葉を覚え、慧き皇女になりましたもうた。即ち、皇女はもはや、かつての小足皇女にあらず。葛城皇子が娘、大田皇女として、安んじて妃となせばよい」

大海人皇子は、凝つと鏡郎女を見つめた。葛城皇子が娘にして、鏡郎女に育まれた皇女。即ち、皇子を監視するために河辺宮に置けとの意に他ならない。

「拒めば」

大海人皇子は言った。

「吾は、生きて岡本宮より、出られぬとか？」

鏡郎女は言った。

「汝が拒めば、大田皇女は葛城皇子には無用となる。無用の皇女にして、葛城皇子がたばかって死に追いやった有馬皇子の姉」

眉根を擡め、郎女は押し殺すように言った。

「葛城皇子が、この皇女を如何するか、汝にも察せられようぞ」

傍らで鼻を吸る音がした。見れば、大田皇女が貌をそむけ、頬に涙が伝っていた。

「案じなたまいそ」

鏡郎女が、大田皇女の肩にそつと手を載せた。

「大海人皇子は今宵、必ず皇女を河辺宮へと随れたまう」

今しばし、別の室にて待たれよ、と促す鏡郎女に、大田皇女はこくりと頷き、拝礼して去った。

「何故に」

大海人皇子は、眼差しを鋭く向けて問うた。

「吾が、かの皇女を連れ還ると、汝は断じる」

「大田皇女は」

鏡郎女は、かすかな笑みを浮かべて言った。

「寄る辺のない皇女。心優しい皇子が、見放すはずもない」

「葛城皇子の手先と知って、吾が宮に入れると思うか」

「有馬皇子が誅されて二年、暗愚な皇女を土蜘蛛として育むには時が足りぬ。吾等が皇子を見張るとすれば、他に手立てはいくらでもある。葛城皇子が望むは、ただ、大海人皇子との仲睦まじきことを、大海人皇子を慕う小豪族どもに見せる、その一点のみ」

まぐわいこそ政事……かつて蘇我鞍作が吐いた言葉を、皇子は思い出した。苦々しげに貌を背けた皇子に、鏡郎女は不快げに言った。

「あるいは、自らがまぐわった皇女を、皇子にまぐわせることで、盟を結ぼうとの腹づもりかも

しれぬ」

かつて二上の仮宮で、葛城皇子はすでに、有馬皇子とともに二人して、大田皇女を姦した。女の軀を共に姦し、男同士の絆を深める。かつて伊勢の小盾が、浜の漁人の妻を姦そうと、皇子を誘った時のように。

両手を突き、有馬皇子に姦されながら、大海人皇子の陽物を口に含み、喘ぎつつ舌を動かしていた大田皇女の貌が脳裡に蘇った。

黙したままの大海人皇子に、鏡郎女は静かに言った。

「二上の仮宮にて、有馬皇子に強いられ、盟を結ぶためにまぐわった者どものうち、今なお慕っているのは大海人皇子ただ独り」

皇子は鏡郎女を見た。郎女は、軽く眼を臥せ、面持ちを引き締めて続けた。

「大田皇女はそう言った。それ故に吾は、皇子に妻め合わせる事に賛した」

「もし拒めば」

皇子は問うた。

「吾は岡本宮を出られるのか」

「大王の詔に抗した皇子は、そのように処断されよう」

「かの有馬皇子のようにか」

「然り」

鏡郎女は短く、しかし有無を言わせぬ声音で応えた。大海人皇子は黙し、考えを巡らせた。

額田郎女は側にいない。打てる手立ては限られる。限られたなかで下手に策を弄すれば、かえつ

て深手を負いかねない。

今は耐えよう。皇子は決意した。たとえ大王が大軍を率いて筑紫に都を遷しても、そのとき、大王の傍らには額田郎女がいる。その時にこそ、動こう。

「大田皇女は随れ還る」

皇子は言った。

「されど、妃となすか否かは、分からぬぞ」

「すべては、皇子が意のままに」

鏡郎女は、なんの感情も見せずに応え、拝礼して立ち上がった。

「大田皇女を随れ来奉る故、そのままここにて待たれよ」

静かに足を進め、戸の前に立った郎女は、ふと皇子に背を向けて言った。

「何故に、額田郎女が、豊璋王子と共に飛鳥に還ってこなかったのか、皇子は知るや？」

「蝦夷との和を確かにするため、大將軍とともにしばし、かの地に留まるのであらう」

「そればかりではない」

郎女は、眼を伏せて言った。

「額田郎女は、皇子に会いたくないと言ったそうだ」

「何故に」

驚いて膝を進める皇子を制するように、静かに座した鏡郎女は、しばし黙し、やがて口を開いた。

「かの地で、豊璋王子と、情を交わした故に」

河辺宮に戻り、出迎えた舎人どもに、大田皇女の寢屋を調えるよう命じ、大海人王子は独り、己が寢屋に坐し、惚けたように中空を見つめ続けた。

この時代、男であれ女であれ、複数の相手と通じることは、避けうるべきことではあっても、禁忌ではない。大海人皇子もまた、額田郎女ばかりではなく、多くの妃と通じ、子もなした。しかし、二年前、「ともに戦う」と言い交わした後、あえて女との交わりを絶った。二上山で有馬皇子とともに大田皇女を姦したときも、その口に精を放ったのみであった。

額田郎女が、大海人皇子の他に、交わりを持った男はいなかったはず。また、大海人皇子が他の女と交わったのは、額田郎女が宝大王の側近として岡本宮に六年籠もらされ、会うこともかなわなかった時期だけであった。

その郎女が、事もあろうに、誰よりも大和が三韓へ出兵することを望んでいるであろう豊璋王子とまぐわったのだ。

何故なるか、吾は知らぬ。鏡郎女はそう言い、それ以上、語ろうとはしなかった。

蝦夷の地で何があったのか……。大海人皇子の脳裡に、額田郎女の白い肌、その肌を這う黒い手が浮かんだ。

否。

皇子は首を振った。鏡郎女の策に違いない。額田郎女への疑心を抱かせ、その仲を割き、葛城皇子の養い女を妃とさせ、意のままに動かそうとするための偽りであろう。額田郎女を信ぜねば、彼等の術中にはまるばかり……。

しかし、如何にうち消そうとも、ひとしづく垂らされた妬心の染みは、どす黒く広がり、皇子は狂おしく懊悩し、褥に面を伏せて呻いた。

どのくらい、そうしていただろう。気がつくど、傍らに大田皇女がいた。

並んで臥し、切なげに皇子を見つめていた。その手が、皇子の股間を彷徨い、陽物をそつと握り、柔らかく撫ではじめた。

こみあげる快樂に、皇子は吾を忘れた。四肢の欲するまま、太田皇女を組み伏せ、激しくかき抱いた。

冬が訪れ、宝大王は難波に行幸した。すでに軍船を造り、難波の津に集めるよう、諸国に詔が発せられ、さらに、劍や矛、弓矢、弩といった兵器が集められていた。年が明ければ、瀬戸の海を渡り、西に向かう。その備えであることは明らかだった。

阿倍比羅夫率いる船団が蝦夷より難波に入ったのは、十二月に入ってからであった。

難波の津は、阿倍の二百艘に諸国から集めた四百艘を合わせ、六百の船で溢れた。船に乗せられる一万の兵は、難波のあちこちに屯し、彼等を相手に多くの市が立ち、時ならぬ喧噪に包まれた。

正月が近づいたある夜。

津に近く、かつて豊日大王が難波の諸処に建てた仮宮の一つに、額田郎女は宿していた。

褥を抜け出して窓の側に立ち、窓を閉め塞ぐ板を僅かに動かした。冬の風が鋭く差し込む隙間から外を見れば、黒々と静まりかえった海面に、六百の船が山の尾根のような影を連ねていた。



その一艘に、十市皇女が乗っている。

蝦夷での一件以来、皇女は心を閉ざしたままだった。難波への帰路、皇女は船の一隅に己がやっと臥すだけの室を作らせて壁をめぐらし、食を運ぶ女嬬以外、人の出入りすら許さない。難波の津に入っても、陸に上がらず、船に籠もったきりであった。

「夜風は毒ぞ」

切なげに夜闇を見つめる郎女の背後に、豊璋王子が立ち、冷えた汗に凍える郎女の白い四肢を、衣で包んで抱きしめた。

「還るのか」

郎女は、皇子の腕かひなに身を委ねたまま問うた。

「人目を避けねばならぬ故」

首だけ出して衣にくるまった郎女を座らせ、室の隅に畳んだ己が衣を身につけつつ、皇子は言った。

「今日、大海人皇子が、長柄宮ながらのみやを訪おとなった」

その名に、郎女の肩が僅かに揺れた。

「大王に拝謁するなり、還っていった。会わなかったのか？」

郎女は首を振った。十市皇女の件を伝えねばと、幾度も書ふみをしたためては棄てた。豊璋王子とまぐわってからも、大海人皇子への思いは変わっていないが、貌を合わせ、言葉を交わす気にはなれなかった。

難波に着いて知ったのは、大田皇女が大海人皇子の妃となり、すでに皇女は身籠みごもったという

報せであった。打ちのめされた郎女は、豊璋王子の訪ないを、拒まなかった。

「ひとつ、問いたい」

王子が声音を変えた。

「葛城皇子も、蘇我や中臣も、すぐにも三韓の地に軍を進める気である。しかし大王は、ただ、筑紫に都を遷すと言われるのみ」

額田郎女は貌を上げ、凝っと王子を見つめた。

「大王の本意は如何なりや」

「それを問いに」

郎女は微笑み、眼を臥せた。

「吾を訪うたのか？」

王子は膝を突き、郎女の肩を抱いた。

「吾は百済の王子。疾とう、百済を救いたい」

「吾はただ」

郎女は、静かに応えた。

「年が明ければ、伊予の熟田津にぎたつに赴く故、その地の民に歌舞を見せよと命ぜられたのみ」  
王子は頷き、さらには問わず、立ち上がった。

翌朝。

難波の津のそこかしこには、高樓たかどのが建てられている。

「木幡よ」

十五歳になった讚良皇女は、高樓のいちばん上に昇り、木柵に腰をかけ、軍船がひしめく間を縫って出入りする船を見下ろしながら言った。

「夏に難波を出て、唐に使いた坂合部石布ら、未だ還らぬと聞いたが、知っていたか」

「知らぬ」

木幡は、和やかな笑みを絶やさず、ずっと海鳥を眼で追っていた。

「坂合部らが唐の都に至るや否や、新羅と唐が百済に攻め入った。ために不運にも、かの地に籠め留められていると聞く」

「ふむ」

聞いているのかいないのか、木幡は頷く。

「夏と言えば、すでに百済と新羅との間は険悪になり、今にも戦端が開かれかねぬ時、何故に大王は、わざわざ唐に使を派したか、分かるか、木幡」

「分からぬ」

「吾思うに、坂合部らは、大和に服属した蝦夷の男女を、随れ行つた。蝦夷の装束のまま、唐の皇帝に見せると」

「ふむ」

「何故、わざわざ蝦夷の男女を唐の皇帝に見せたのか、木幡には分かるか？」

「分からぬ」

「このごろ」

讚良皇女は柵を降り、木幡に並んで坐した。

「史記という唐の書を読んだ」

「しき？」

「然り。唐が漢と呼ばれていた昔、司馬遷なる者が書いた。代々の皇帝や臣の事績が記してある」  
木幡は微笑んだ。葛城皇子に引き取られて難波に至って以来、讚良皇女はひたすら難波の書庫に籠もっていた。時折、思いついたように木幡を呼びだして山野を遊ぶ他は、書を読みふけて過ごした。難波は、このごろは絶えたが、唐や三韓の船の出入りも多い。讚良皇女は、彼等から書を買ひ漁り、代価は葛城皇子に払わせた。皇子は、かつての、粗野で荒々しい気性よりは、静かに書を読む讚良を歓迎しているようであった。

少し肥えた……。木幡は、ふつくと丸くなった讚良の面差しや、腕や手の甲を見て思った。かつて痩せていた頃の、人を寄せ付けぬ鋭さや陰しさは、丸やかな鈍みを帯びてきている。とはいえ、心を寛やかに開けてみせる相手は、限られているが……。

「史記だけではない」

讚良は声を張り上げた。

「木幡も一度、書庫へ来よ。漢書、春秋、論語、大学、中庸……様々な書がある」

「いずれも唐の書か」

「然り」

「吾は、文字を読むと眠くなる」

けらけらと朗らかに笑い、木幡は言った。

「讚良の話を書く方が、吾には面白い。眠くならぬ」

「春秋とは、かの孔子が編んだ史。その孔子の教えをまとめたのが論語。さらに大学とは……」

「唐への使いの話ではなかったのか？」

「その事」

讚良は高ぶり、両の手を振り回して説いた。

「そもそも唐は、天地開けて黄帝が即位されてより千幾歳、天より命を受けた皇帝の下、王化に服する民を徳を以て統べてきた。王化に服さぬ者は、これを外蕃と呼ぶ。すなわち北狄、南蛮、西戎、東夷。外蕃のうち、皇帝に朝貢するものを王として冊封し、随わぬものは軍を興して討伐し、四海を遍く統べるものこそ、唐の皇帝。さらば、吾等大和は東夷の一國として、古に朝貢して倭王に冊封された。これは漢書なる史に記されてあり」

「吾等は唐から見れば外蕃か」

木幡は首を傾げた。

「外蕃、東夷……。大和にとつての蝦夷のようなものか」

「然り、然り」

讚良は手を打って歎んだ。

「さらば、唐への使に、蝦夷を伴わせたその意を、木幡も悟ったであろう？」

「分からぬ」

「ならば聞け。大和の大王は、唐の皇帝に服する外蕃には非ず、自ら東海の天下の中心にあり、外蕃なる蝦夷に王化の徳を施す。すなわち、唐の天下とは別の、大和の天下を治める大王である。

この意を唐の皇帝に伝えるがための使と、吾は見た」

「唐の天下とは、別の天下か」

木幡は空を見上げ、つぶやくように言った。

「ならば、唐の皇帝は、大王の意を悟って怒り、故に百済に軍を派したというわけか」

讚良は口を開け、眼を見開いた。

「木幡よ、汝は吾よりも慧い！」

やにわに木幡の腕を掴み、讚良は立ち上がった。

「疾う、行こう」

「いづくへ」

「長柄宮へ」

「何をしに」

「大王に会いに」

讚良は叫んだ。

「大王に、汝が言葉を奏上する」

眼を細めて、宝大王はしきりに語る讚良皇女を見つめた。

長柄宮の中庭の亭。宝大王は、女孺に茶を運ばせて二人の乙女に供させ、退がらせた。

大和では茶の栽培は始まらず、唐や三韓より希に渡り来る貴重な品であった。珍しげに湯気に鼻を寄せ、その香を嗅ぐ木幡を指さしつつ、讚良皇女は訴えた。

「すなわち、唐の皇帝は、独立した天下を治めようとする吾等の意を諾さず、飽くまでも外蕃で  
いよ、との意なり。それ故……」

もはや声も噎れ、頬は紅潮しきつた讚良は、そこまで語つて讚良は口を噤んだ。

「それ故？」

大王が優しげに問うた。

「それ故……」

大和は、何をすべきというのだろう。

「その先は、書庫の書には、記されてあるまい」

童女のように頬を膨らませて俯いた讚良の頭を、宝大王は撫でた。

「その先を考え、詔を發し、民を動かすが、大王ぞ」

讚良は、凝つと大王を見つめた。未だ五十余歳とは思われぬ深く刻まれた皺に、大王として断  
を下してきた日々の重さを覚え、気圧されそうになった讚良は、懸命に考えを巡らせた。

「それ故に」

不意に木幡が口を開いた。

「大王は、如何されようと」

「如何するか」

静かに茶を口に運びつつ、宝大王は応えた。

「知つていて言わぬも、大王のつとめである」

「それ故に」

木幡は続けた。

「筑紫に軍船を進めつつ、その意とするところを詔したまわぬのも、大王ゆえに？」

宝大王は破顔した。大きく口を広げ、のけぞつて笑つた。

「汝等は慧い」

若やいだ声音で哄笑する大王を、二人の乙女は惚けた眼差しで見つめた。

「汝等のいずれが、否、いずれも、共に大和の大王となる日が来ようぞ」

大和の大王……。讚良と木幡は貌を見合わせた。さらに大王は続けた。

「されど、大王のつとめは、策を巡らすばかりにあらず、策や謀ばかりでは、官も民も随わぬ」

「では、如何に随わせる？」

膝を進めて問う讚良に、大王は言つた。

「それを知りたければ、額田郎女にこそ聞け」

その名を聞いたとき、讚良の貌が曇るのを、宝大王は見逃さなかつた。

嫌つてゐるのではない。疎んじてもない。あえて言えば、妬み……。

やがて二人は王宮を退がり、宝大王は亭の椅子に背をもたせかけたまま、軽くため息を吐いた。

讚良は葛城皇子の娘。大王にとっては孫。

木幡は、かつて大王が摂政に任じ、葛城皇子に討たれた古人皇子ふるひとのみこの娘。

蘇我鞍作が討たれた年に生まれた二人の皇女は、過酷な運命もくぐり抜け、慧い乙女に育つた。

二人は今、葛城皇子が養つてゐる。

吾が子ながら、寵愛した鞍作を自ら討った葛城皇子を、宝大王は憎んだ。王宮への出入りを赦した今も、憎しみは消えていない。

かの二人の皇女を、葛城皇子の手駒としてはならぬ……

宝大王は手を打って女孀を呼んだ。

「額田郎女をこれへ」

しばし待つ裡に、額田郎女が現れ、膝を突いて拝礼した。

「郎女よ」

大王は静かに手招きし、問うた。

「十市皇女は如何に」

「相変わず」

眼を臥せたまま、郎女は応えた。十市皇女との一件は、大王には伝えてあった。表沙汰にはすまい、とのみ大王は言った。豊璋王子との情交は、さすがに打ち明けられなかった。

「年が明ければ難波を出で、熟田津へ行くが」

大王は言った。

「十市皇女は、讚良と木幡と、同じ船で行かせよ」

郎女は貌を上げた。大王は続けた。

「汝は吾と同じ船に。葛城皇子、豊璋王子は、それぞれ別の船に乗せる」

熟田津までの数日、三人の皇女は同じ船で過ごすことになる。郎女は、躊躇いがちに言った。

「されど、十市皇女は……」

船の一隅に囲いを巡らし、出てこようとはしない。讚良とはかつて、十市の里で共に過ごした。気むずかしい讚良も、十市には馴染んだ。しかし、今の十市は、かつての朗らかな皇女ではない。「年も似た三人」

大王は、郎女の言葉を遮った。

「睦み合えば、十市皇女の気も癒されよう」

それきり眼を閉じ、黙した。退がれ、との意である。

「大王」

額田郎女は、後ずさりに下がり、背を伸ばして踵を返そうとして、立ち止まった。

「果たして吾らは、三韓で戦うべきや否や」

大王は眼を閉じたままであった。郎女は、凝っと、応えを待った。

「郎女よ」

しばしあって、大王は眼を開けた。

「戦うや否やを決めるのは、吾ではない」

訝しげに眉を擡める郎女に、大王は微笑んだ。

「吾等が大軍を筑紫に進め、唐が如何するや、新羅はどう動くか、あるいは」

大王は、再び眼を閉じた。

「葛城皇子や、蘇我、巨勢、中臣、そして汝が如何するか」

それによって、如何なる詔を下すかが、決まる。

そこまで呟いて、宝大王は口を噤んだ。やがて、静かな寝息が、鼻孔から漏れ伝わってきた。

額田郎女は、しばし寝入った大王を見つめ、やがて拝礼して去った。

その夜、難波長柄宮の近く、葛城皇子の宮。

「それでは……」

葛城皇子は、しきりに指で髭をつまみ、忙しく扱いたり、撫でたりを繰り返しつつ、言った。

「大王が御意は、未だに明らかならず、と」

「然り」

頷く鏡郎女に、皇子は不満げに唇を歪めて言った。

「額田郎女と、大海人皇子との仲は裂いた」

鏡郎女は頷いた。葛城皇子は続けた。

「大海人皇子には、かの有馬皇子の異母姉なる腐れ皇女をあてがった。また、額田郎女なしに、かの皇子、策を弄しうるとも思えぬ。残るは、大王さえ、出兵の意を固めれば、吾等の望みのまま、事は動く。否……」

葛城皇子は、拳を固めた。

「すでに六百の船、万を越す兵を集めた。さらに、伊予や吉備、筑紫等の国にも兵を調えるよう詔も発せられた。今更、軍を興さぬなど、ありえることではない」

「さて」

鏡郎女は薄く笑った。

「兵を調べ、しかも軍を興さず済ませるも、一つの策ぞ」

葛城皇子は眉を顰め、事問いたげに、郎女を見た。

「鬼室福信をはじめ、百済の遺臣ども、各地で唐や新羅の軍とよく戦い、多くの城を奪い、いまや唐も新羅も講ずる策もない有様と聞く。ここで大和が、二万の水軍を筑紫に置けば、あるいは唐と談合し、百済王家のひとつとを還らしめ、唐の兵を退かせるも、ありえぬことではあるまい。もし、そうなれば」

臉を上げ、からかうように郎女は、葛城皇子に微笑んでみせた。

「戦わずして、大唐を退かした大王の御稜威は弥増そうぞ」

「蘇我や巨勢、中臣らが諾するものか」

皇子はいらだつて床を強く踏みしめた。

「豪族どもの支えなしに、大王の御稜威など、脆いもの」

「かの豊日大王のようにな」

郎女は遮った。

「されど、百済との軍を望むは大豪族ばかり。中小の豪族や民は、戦を望んではない。あるいは宝大王自ら率いる軍であればこそ、大王を慕う彼等も随っている。豊日大王は、大豪族にも、小豪族にも、民にも慕われず、故に容易く、大王の御位を失った。宝大王が、戦なしに唐を退かせれば、彼等はより、大王を崇敬しよう。否、もし大王が戦を起こし、唐に敗れることあれば如何。豪族や民の支えは失われ、その御稜威は崩れる」

郎女は、こう結んだ。

「それに気づかぬ宝大王でもあるまい」

「されば汝は」

葛城皇子は問うた。

「このまま坐して何もするな言うのか」

「あるいは」

鏡郎女は、宛然と微笑んだ。

「宝大王ではなく、葛城皇子が自ら兵を率い、三韓を攻めれば如何」

「吾が？」

「然り」

鏡郎女は、眼を逸らして立ち上がった。

「かつて飛鳥なる板蓋宮にて、葛城皇子は大王の御前で蘇我鞍作を自ら討った。ために宝大王の身籠もりたもうた赤子が流れ出で、大王自らは数年、廢れ人として有馬宮に幽閉された。己を生んだ母を、酷い策で追い込んだ皇子ならば、儒者の説く孝の教えなど、心乱さず蹂躪し得るはず」

鏡郎女の意を悟り、葛城皇子の貌が青ざめた。

「汝は吾に、母なる大王を……」

郎女は、皇子に背を向けて続けた。

「それも一つの策。みごとやりおせれば、筑紫に集まる二万の兵は、葛城皇子の意のままに動く。されど葛城皇子よ、板蓋宮にて自ら手を汚した汝が、たとえ大王の御位に即こうとも、すべての民に慕われる御稜威は、汝にはない」

剣を挿んで立ち上がり、詰め寄ってきた皇子の股間を、鏡郎女は振り向きざまに両手で挿んだ。

「みごと唐に勝たねば、しよせん御稜威なき大王、やがて大海人皇子に取って代わられよう。汝に、その覚悟がありや」

激痛に貌を歪め、息をすることもできず、葛城皇子は呻いた。

「必ず勝て。唐を退け、新羅を滅ぼし、さらに高句麗、百済をも、大和の版図となせ。汝が大業を、必ず、果たせ。その覚悟があれば、吾は、汝に味方する」

鏡郎女は手を離し、静かに去った。

葛城皇子は床にくずおれ、動くことも出来ず、しばし呻吟した。

難波の、蘇我の別邸に、大官どもが貌を合わせていた。

葛城皇子がおかしい。

「頬はこけ、食もろくに摂られぬ有様。やはり、大王が三韓出兵の詔を、なかなか下したまわぬ故の心労なるか」

氣遣わしげに、巨勢比等は、赤ら貌を歪めて嘆じた。

「蘇我赤兄臣よ」

温厚な紀大人が問うた。

「臣が娘、常陸郎女は、葛城皇子が妃。この難波にも伴うて来られたはず。常陸郎女は、皇子について何か？」

「何も」

赤兄は首を振った。

「この頃は、他の妃の許へも通いたまわず、独り宮に籠もり、朝議に列せられる他は外に出ることも、人を近づけることもなく過ごしたまえると聞いた。大業を前にしての懊惱、皇子らしくもない」

かつて、葛城皇子と謀つて有馬皇子を陥れた蘇我赤兄は、いつしか、三韓出兵を望む大豪族どもの中心にいた。

「いやさて」

中臣金なかのしめのかねが、太った腹を撫でつつ、軽薄な面差しを緩めて笑った。

「存外、頼りにならぬ皇子よ。とはいえ、他に吾等が立てるべき皇子も見あたらぬ」

「言うな」

赤兄が低く、びしりと制した。

「葛城皇子をして三韓に軍を興せしめ、吾等が昔日の栄えを取り戻す。他に手立てのありや」

宝大王によって、長らく政事まつりごとの場から遠ざけられ、その勢いを衰えさせられていた大官どもにとつて、三韓出兵は、百済の鉄の権を得、その蔵を満たす好機であった。

「そうと定まった上は、葛城皇子を盛り立ててゆく他に、吾等に策はない」

一同が黙したその時、

「さて、それは如何であろうかの」

低い声が響いた。四人の大官は息を呑み、声の方を見た。

白髪の男が、堅く閉ざされていたはずの戸の辺に立っていた。その傍らに、三十路半ばの女が

並んでいる。

「鎌子……」

中臣金なかのきんが呻いた。

何者かにふぐりを碎かれ、廃れ人となって難波の別邸に籠もった従兄なる鎌子を、金はすでに世に無き人として顧みることもなかった。自ら中臣の家の長おとことして振る舞い、蘇我や巨勢に近づき、密かに軽んじられつつも、ひとつの立場を得た。

その鎌子が、美うまし女とともに、密議の場に忍び込んできたのだ。

「懐かしいの、金」

鎌子は従弟を一瞥し、膝を折って大官どもに拝礼した。

「中臣鎌子よ、いつ、ここへ？」

蘇我赤兄の問いに、鎌子はすらすらと応えた。

「先ほどより」

「では、吾等が談合を、耳にしていたというのか」

腰の剣に手をかけた巨勢比等を、女が制した。

「無用の抜剣、御身のためにもならぬぞ」

女は、顎を動かして戸の外を示し、言った。

「見張りの兵、三人ばかり、そのふぐりを碎いた。みな、凄まじい苦しみに苛まれつつ、手足を縛られ、口を塞ふさがれ、倉のなかで呻しん吟ぎんしつつある。汝も同じ目に遭いたいか」

蒼あおざめた巨勢比等おほせひらに変わり、紀大人が問うた。



「女よ、汝は何者ぞ」

「名は言えぬ」

「吾が……」

鎌子が言った。

「妻である。土蜘蛛として、大王に仕える者」

土蜘蛛。

その言葉に大官どもの気は萎えた。土蜘蛛の手引きなれば、厳しい警戒を破り、邸の奥まで忍び入るも難しくはない。

「心安んじられよ。大官の方々を害さんとして来たったわけではない」

静かに告げる鎌子に、赤兄は問うた。

「されば、何故、ここに」

「方々の憂いは、一に葛城皇子にあり」

大官どもの眼差しは、一に葛城皇子にあり」

「吾はかつて、葛城皇子とともに数多の策を練った。皇子の性はよく知る。大事を前にしての皇子の懊悩、吾には決して意の外に非ず。かの皇子、うわべは剛なるも、猜疑の心強く、気弱な性をも持ちたもう。まして……」

鎌子は、鋭い眼を大官どもに向けた。

「この度の大事、妨げとなるは、宝大王その人。かつて、豊日大王を失墜せしめ、自ら大王の御位に即きたまおうとなされし折り、有馬官より還られし宝大王の威に気圧され、長年練り上げた

策を打ち砕かれた」

「何が言いたい」

気短な巨勢比等の問いに、鎌子は言った。

「葛城皇子をして、宝大王より出兵の詔を得ようとするは、如何なものであろうかの」

「汝は……」

蘇我赤兄が静かに問うた。

「葛城皇子独りを頼るなかれ、そう言いたいのか」

鎌子は応えず、ただ微笑んだ。

「されど……」

中臣金が口を挟んだ。

「葛城皇子の他に頼るべき皇子のいようか。大海人皇子は三韓出兵に抗いたまう御方。吾等が盟

主にはなりえまい」

「盟主と仰ぐべきは」

鎌子は低く言った。

「大王家の皇子ばかりでもあるまい」

大官どもは黙し、互いを見やった。

「蘇我の臣よ」

戸のあたりに立っていた女が口を開いた。

「かつて蘇我鞍作が邸に蔵せし国史を、汝は知るや」

「知っている」

赤兄は頷いた。

「鞍作が討たれ、その父なる毛人が邸に放った火にて、国史もまた焼け滅びたと聞いた」

「たしかに国史は焼かれた」

女は、唇の端を歪めて笑った。

「されど、そこに記されてあつた事どもは、すべて吾が書き写し、今は吾等が倉に蔵されてあり」  
大官どもの前に進み出て坐した女を、蘇我赤兄は瞬きもせずに見つめた。土蜘蛛を眼のあたりにし、怯える気を押さえつけつつ、女の話聞いた。

「その国史によれば、大和を開いた古えの飯豊大王は、もともと百済の王族にて、飯豊大王を佐けた蘇我満智、すなわち汝ら蘇我の祖もまた、百済の出である。その飯豊大王の裔より大王の御位を篡奪したのが田村大王、すなわち宝大王の夫であり、葛城皇子の父。彼等はもともと、吉備より流れ来た輩。すなわち、国史よりすれば、正統の大王にはあらず」

「何を言うか！」

巨勢比等が声を荒げた。

「汝は、土蜘蛛の分にて、大王の御稜威を貶しめんとするか」

「無知を恥じよ」

女は冷ややかに巨勢比等を一瞥し、言った。

「中臣鎌子が言うがごとく、大王家の皇子にあらずとも、盟主として仰ぐべき御方は、他にもおわす。それが誰なるか、これほど説いても分からぬとは、さても鈍なるかな、恥じよ、巨勢の臣」

総身をわななかせ、巨勢比等は立ち上がった。腰の剣に手をかけ、女のすぐ前に立ち、見下ろした。女は平然と比等を見上げ、笑った。

「手を伸ばせば、すぐにも汝がふぐり、砕くは容易いの」

比等が後ずさりするより早く、女の拳が彼の股間を打った。青ざめて床に膝をついた比等の腰から素早く剣を奪い、鞘を払い、苦しげに歪んだ彼の鼻先をかすめ、床に白刃を突き立てた。

「鎌子よ……」

立ち上がることもできず、低く呻き続ける比等を、青ざめて見つめる大官どもなかで、蘇我赤兄はやつと口を開いた。

「汝は……葛城皇子ではなく」

その名を口にするには憚られ、赤兄は逡巡した。

「かの……百済の……あの御方を……」

鎌子は応えず、しかし、否とも言わなかった。

「盟主と仰ぐべき方を、一人に限るは危うい」

大官どもは黙し、鎌子も口を閉ざした。暗い室に、魚油の火影が揺れた。

「さて」

女が立ち上がった。

「吾は去ぬ。これより先は、鎌子と談合したまえ、方々」

注がれる大官どもの怯えた眼差しをなで、女は誇らしげに告げた。

「吾が名は安見娘。この名を聞いた上は、覚悟したまえ。吾等を裏切り、陥れんとする者は……」

安見娘は口を閉ざし、眼をつぶって汗を流し、激痛に絶える巨勢比等の肩を叩いて哄笑した。「ふぐりを砕かれるとこそ、知れ」

しばし後。

蘇我の別邸の門をくぐって出てきた中臣鎌子を、安見娘が出迎えた。

鎌子も安見娘も、目立たぬ粗末な衣を着ていた。慌ただしく行き来する壮丁や兵の人波に混じり、肩を並べて歩きつつ、鎌子は薄く笑った。

「土蜘蛛を妻としたは、百の詭弁よりも効く」

これよりは、蘇我も巨勢も、大豪族どもは吾が策に随おう。鎌子は、彼等の名を口にすることなく、その意を安見娘に伝えた。

「かの百済の王子には、その策は伝えるのか」

安見娘の問いに、鎌子は首を振った。

「今は何もせぬ」

豊璋王子が、額田郎女と情を通じている間は、滅多なことは言わぬがよい。

葛城皇子の懊悩が何に因るものか、鎌子は察していた。宝大王には軍を興す気はない。皇子が未だに、三韓や唐をも支配する大和の王になるうという大望を抱いているとすれば……否、抱いているに違いない。そのために皇子は、自らの手で母の寵愛する鞍作を討ち、叔父である豊日大王をも一度擁立しておきながら、裏切ったのだから。

その汚名は、人望のなさという代償となって、葛城皇子を苦しめている。かの皇子の性からす

れば、己が野望、すなわち三韓征服を果たすことで、汚名を晴らそうとするであろう。その野望を果たすには、宝大王を排し、自ら大和を統べるしかない。それが、葛城皇子に出来ようか。

出来うるとすれば……。鎌子は思った。鏡郎女が、皇子に助力するより他はない。土蜘蛛を動かせば、事はあるいは成就しよう。しかし、豪族や民が、己が母に刃を向けた皇子に、心から随うであろうか。

敵は三韓ではなく、大唐。国が一つにまとまらねば、とても、軍で勝つことなど、出来うることではない。

さらに、飛鳥に留まった大海人皇子。策を弄さぬが故に、奇妙な人望を得ているかの皇子が、どう動くか。

……今、ここで未来を読んでも仕方がない。

策でもって事を動かすのではなく、事の成り行きに策を合わせる。それが、かつて策の代償として、ふぐりをひとつ失った鎌子の智慧であった。そして、事が動く日は近い。今は、どう事が起ころうとも対処できる備えをしておくことが肝要。

そして、鎌子はまさに備えた。土蜘蛛の後ろ盾を得た鎌子を、もはや、大豪族どもはないがしろにはし得ない。

「吾、安見娘を得たり」

不意に鎌子がつぶやいた。小首を傾げ、こちらを見る安見娘に、鎌子は微笑んだ。

「不比等は、山背の田辺に預ける。その扶養は、中臣の倉より賄う」

安見娘の面差しが輝いた。土蜘蛛の掟ゆえ、人目につかぬよう、難波の葦原に埋もれた鎌子

の邸に隠すしかなかった己が子は、中臣の子と認められたのだ。

田辺は、飛鳥の北、山背の地にある小豪族。家柄は低い、書を扱って王宮に仕える官を出している。飛鳥から離れている故に、人目にもつくまい。

「田辺ならば、不比等を慧い子に育むであろう」

鎌子の言葉に安見娘は頷き、ふと眼を潤ませた。

年が明けた一月六日の朝。

難波の長柄宮の門が開け放たれ、広大な中庭に、数十人の舞女が丸く円をなしてうづくまつていた。その四圍は、大小の豪族や、武装した兵で埋め尽くされている。

銅鑼が鳴り響き、大極殿より輿が二つ、壮丁に運ばれて中庭に現れた。最初の輿には白い巫女装束の鏡郎女と額田郎女。大きな鏡を胸に捧げ持ち、舞女が描く円のなかに入って膝を突いた。

続いて、宝大王の輿が現れる。手に一丈の銀の鉞を持ち、白装束の胸に甲冑を、額に白い布を巻き、男童のように鬢を結び、腰に長剣を提げていた。

大王は輿を降り、東に向かつて拝礼した。その左右に進み出た鏡郎女と額田郎女が、鏡を東の空に向ける。昇る朝日の光が鏡に当たり、はね返って宝大王の貌を照らした。

ひふみよいむなやこと……。

ひふみよいむなやこと……。

ふるべ ゆらゆらとふるべ……。

ふるべ ゆらゆらとふるべ……。

舞女どもの低く唱える呪が木霊となつて長柄宮に響き渡る中、額田郎女が立ち上がり、高らかに歌った。

熟田津に

船乗りせむと月待てば

潮もかなひぬ

今は漕ぎ出でな

ひとびとはどよめいた。

数十人の舞女は、懐から着い巾を取り出し、双の手で高く振った。たちまち中庭に、海の水のうねりにいた蒼い波が現れ、そのなかを大王を乗せた輿がゆつくりと、門に向かつて進んでいった。

熟田津に

船乗りせむと月待てば

潮もかなひぬ

今は漕ぎ出でな

舞女の歌と、ひとびとの歓呼を受け、大王の輿は兵に囲まれ、宮門を出た。鏡郎女と額田郎女の輿がそれに続き、さらに馬に乗った葛城皇子、蘇我や巨勢らの大官、鉾を高くかざした兵の行列が、民のつくる人垣のなかを、難波の津に向けて進んだ。

「大海人皇子には会ったのか」

輿の上で、ふと、鏡郎女が問うた。大海人皇子は、見送りのため難波に来ているはずであったが、長柄宮には姿を見せていない。

そつと「警すると、額田郎女は、瞬きもせず大きな瞳を見開き、引き結んだ唇も、薄く紅をさした頬も、堅く動かない。

「しばし、飛鳥へは還れぬぞ」

声に、哀れみが籠もっていた。額田郎女は応えなかった。

やがて行列は、難波の津に至った。聳える高樓の彼方に、二万の兵を載せ、喫水が深く沈んだ六百の船団が、各々、誇らかに旗幟を靡かせている。

輿が一つの高樓にさしかかったとき、ふと見上げた鏡郎女の眼に、楼上より見下ろす人影が気づいた。

「額田郎女よ」

思わず、鏡郎女の声が弾んだ。

「大海人皇子ぞ」

額田郎女の唇が一瞬強張った。しばし息を止め、ゆっくりと貌を上げた。

確かに大海人皇子であった。切なげにこちらを見下ろす懐かしい眼差しに、額田郎女の瞳が揺れ、やがて目尻に溜まった涙が、頬を伝った。

熟田津に

船乗りせむと月待てば

潮もかなひぬ

今は漕ぎ出でな

行列の兵たちが高らかに歌い、船上に整列した兵たちが、鉾を高く突き上げ、これに応じた。

海行かば

水漬く屍

山行かば

草むす屍

大王の辺にこそ死なめ

かえりみはせじ

難波の津に、歌と歓呼が響く中、行列はさらに進み、額田郎女の視界から、大海人皇子の姿は消えた。